

Alain de Janvry and Elisabeth Sadoulet,
Development Economics: Theory and Practice (紹介)

著者	高野 久紀
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	58
号	4
ページ	103-104
発行年	2017-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00049818

Alain de Janvry and Elisabeth Sadoulet,

*Development Economics:
Theory and Practice.*

London: Routledge, 2016, xxix + 828pp.

こうのひさき
高野久紀

本書は、学部上級、(非経済系の)大学院レベルの開発経済学の教科書である。これまで、学部上級、大学院入門レベルの開発経済学の代表的な教科書といえば、Ray [1998], Bardhan and Udry [1999]があったが、どちらも理論に重きを置いており、近年の実証分析や政策評価志向の開発経済学の研究をまったくカバーできていなかった。また、日本語の教科書としては、黒崎 [2001] が理論と実証研究を紹介しているが、計量経済学の知識を前提に書かれており、また、実証分析の妥当性を担保するためのリサーチデザインについてはほぼ論じられていないので、いかにバイアスを排除した実証分析を行うかという識別重視の近年の開発経済学研究の潮流をうまくカバーした教科書は存在していなかった。農家家計モデルに基づく実証研究を長年リードしてきた研究者によって書かれた本書は、そのギャップを埋め、読者に、開発経済学のフロンティアの研究を、数多くの実証研究を参照しながら紹介してくれる非常に有益な教科書である。

扱っているトピックは幅広く、貧困や労働、移民、金融サービス、貧困ターゲット、教育や健康などの人的資本、農家家計モデルといったミクロなトピックから、経済成長、内生的経済成長理論、国際貿易や国際金融といったマクロなトピックも豊富に扱っている。これ一冊で、開発経済学における代表的な研究をかなりの程度カバーしているので、開発経済学を専門的に学ぼうとする人には、必読の一書である。また、一般向けとして書かれた Banerjee and Duflo [2011] や Karlan and Appel [2011] と異なり、理論的フレームワークを提示しながら、より広範な研究について触れているところに特色がある。さらに、第4章では、バイアスを排除するため

の実証分析のテクニックに関して多くのページを割いて説明しており、実証研究を始めようとする読者には役立つであろう。

ただし、本書の記述には厳密さに欠けるところが散見される。たとえば、ファジーな回帰非連続デザイン (fuzzy regression discontinuity design) の説明に用いられている図には、識別に必要な「非連続」性がなく、不正確な図となっている。また、第4章で因果推論の重要性を強調しておきながら、その後の章(とくにマクロなトピックの章)においては、バイアスのある可能性が大きい計量分析結果も、何の留保もなく紹介されているので、初学者にとっては混乱を招きやすくなっている。さらに、さまざまな実証研究の結果が紹介されているのは良いが、実際にどのようなリサーチデザインでその結果を得たかが書かれていないので、実証結果の妥当性も判断しにくいし、研究を自分で行おうとする読者にとっては、不十分な記述になっている。統計的推論についても触れられていないので、本書を読んだだけでは開発経済学の実証論文を読むのに十分なスキルは身につかないだろう。また、随所で経済モデルを紹介しているが、ほとんどの場合において、モデルの設定を説明するだけで、実際にそのモデルをどう解き、その解がどのように特徴づけられるかについてまったく説明されていないので、モデルの示唆がわかりにくくなっている(経済成長論の章においては、モデルを解かずに記述したためか、誤った記述がみられるので注意が必要である)。理論に関しては、Bardhan and Udry [1999] が依然として唯一の大学院レベルの教科書である。

したがって、さまざまなトピックに関する最近の研究動向を押さえるには適しているが、開発経済学の研究を志す大学院生が研究能力を伸ばすために読む書物としては若干物足りない。むしろ、開発経済学研究へ足を踏み入れる第一歩という心構えで読まれるべき本である。

文献リスト

〈英語文献〉

Banerjee, Abhijit V. and Esther Duflo 2011. *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to*

- Fight Global Poverty*. New York: PublicAffairs (邦訳は山形浩生訳『貧乏人の経済学——もういちど貧困問題を根っこから考える——』みすず書房 2012年).
- Bardhan, Pranab and Christopher Udry 1999. *Development Microeconomics*. Oxford: Oxford University Press (邦訳は福井清一・不破信彦・松下敬一郎訳『開発のミクロ経済学』東洋経済新報社 2001年).
- Karlan, Dean S. and Jacob Appel 2011. *More Than Good Intentions: How a New Economics Is Helping to Solve Global Poverty*. New York: Dutton (邦訳は清川幸美訳『善意で貧困はなくせるのか?——貧乏人の行動経済学——』みすず書房 2013年).
- Ray, Debraj 1998. *Development Economics*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- 〈日本語文献〉
- 黒崎卓 2001.『開発のミクロ経済学——理論と応用——』岩波書店.
- (京都大学大学院経済学研究科准教授)